

サハリン白鳥ツアーに参加して

村瀬正夫

このツアーは勿論サハリンにおける北帰時に合わせた白鳥の観察旅行であったのですが、私にとってサハリンは、父の事業の関係で、生れ故郷でもあり、中学4年まで育った思い出の地でもあった訳です。

国破れて山河ありとはよく言ったもので、街のたたずまいは異国風に変貌し果てておりましたが、自然の有り様はやはり昔の樺太をそのままに残し、何かジーンとくるものがありました。

過去の70年を、常に前だけを見つめて駆け抜けて来た人生に、ひと時、振り返る機会を与えてくれた今回の旅にはそれなりの意味があったと感謝しております。

拙い詩を添えて感想とさせていただきます。

今は失なわれた
故郷を恋うる詩

村瀬正夫

ひとみなが ふるさと恋いて
胸ふるえ たかぶるなかで
我ひとり なぜかは知らず
うつうつと 心は沈む
幼なくて 過ぎし日々は
いつにても 夢で会はなん
野づら舞う トンボや蝶や
兎追う あの丘と谷地
黒百合も スズラン花も
愛らしき ロシヤ娘も
春浅き サハリンの鳥
流水と さやけき雲の
たたずまい 昔のままに
流れては 老いの目に沁む
年月の 今は帰らず

ツアーで行く バスより見ゆる
異邦人 あふるる街に
立ち並ぶ 冷たき家なみ
土ほこり 凹凸の道
ありし日の 面影いずこ
父母のおわさぬ果の
花苔も フレップの木も
悠久の 流るるままに
くり返し くり返しつつ
新たなる 生命育くむ
今、我れに 錦を飾る
友人も 夢さえもなし
故郷は 遠きにおいて
偲ぶこそ 懐かしきもの